



風疹の流行について

金子 剛 (保健管理センター
医学医療系 講師)



首都圏や近畿地方を中心に風疹が流行しています。国立感染症研究所によると、本年初めから8月までの患者数は約1,000人をはるかに超え、全患者数調査が実施されてから過去最悪のペースとなっています。これに対し、厚生労働省は予防接種の情報提供など対策を進めるよう、全国の自治体に文書で指示をしております。そもそも風疹はトガウイルス科ルビウイルス属の風疹ウイルスによる感染症。初期症状は感冒様症状(せきやくしゃみ)が中心です。2~3週の潜伏期間ののちに①発熱②全身性の発疹③頸部リンパ節の腫れという3兆候がこの病気の特徴です。風疹は主としてこどもの病気であり、3日はしかと呼ばれてきました。症状は比較的速やかに軽快しますが、成人では症状が強めにでて、1週間も高い熱が続くことがあります。この病気に特效薬はなく、かかってしまった場合は症状を抑えるための治療が中心。あとは自然治癒を待つというのが一般的です。「まあ、それくらいなら大丈夫」と安心してはいけません。その理由は①2,000~5,000人に1人の割合で脳症や紫斑病といった重篤な合併症を併発する、また、②妊娠初期(12週まで)の女性が罹患した場合に赤ちゃんの白内障・難聴及び心奇形といった先天性風疹症候群を引き起こす、ということがあるためです。

風疹感染対策において重要なことは、厚生労働省の通達の通り「予防」です。風疹のウイルスは、「せき」や「くしゃみ」など「唾液」を介して感染するため、人ごみや電車の中などでの感染に注意が必要です。外出した後の手洗いやうがいの徹底や、ご自身に「せき」などの症状がある場合のマスク着用(セキエチケット)も大切です。また、本年の感染患者の傾向としてその約80%が男性で、20~40代の発症が目立っています。この理由として1977~94年の期間風疹の予防接種は女子中学生のみが対象であり、この世代の男性のおよそ20%は免疫を獲得していないといわれているからです。ちなみに南北アメリカ大陸やヨーロッパでは風疹・麻疹の予防接種施行率は95%以上といわれ、現地における発症はほとんど認められず、ワクチンによる制圧がなされております。日本においても、風疹そのものの流行だけでなく、先天性風疹症候群といった悲惨な合併症をなくすために

は、妊娠前の女性と共に成人男性を含む「社会全体での免疫」が重要と考えられております。

このための具体的な行動として最も簡単な方法は①母子手帳による接種の確認です。現在日本では麻疹・風疹ワクチン(MRワクチン)を2回接種(第一期は1歳時と第二期は小学校就学前の合計2回)しています。2回接種した場合の免疫獲得の可能性は95%と高率であり、もし母子手帳に2個判子が押されていればおおむね安心と考えていいでしょう。また、一度風疹に罹った人は終生免疫が得られるとされており、二度と罹患することはありません。しかし風疹に似た症状を呈する病期(麻疹・伝染性紅斑)などを風疹と思いこみ「幼少時に罹ったことがある」と勘違いする場合があります。よって②風疹ウイルスに対する抗体が存在するか否か(免疫能の有無)を確認することは確実な方法です。これに関しては最寄りの保健所・地域の医師会及び医院にてご相談ください。

通常風疹は春から夏にかけての病気とされております。したがってこの原稿が皆さんのお手元に届く9月にはその流行が終息しているはずであり、そのことを祈っております。しかし8月現在、例年の3倍というペースで流行していることから、その注意喚起の意味を込めてお知らせいたしました。なお、今の大学生世代は1995年から施行された2回接種方式が男女ともに対して行われており、ほとんどの方が予防接種を受けているはずですが、まずはご実家に電話して、母子手帳の確認をお願いいたします。「大丈夫だよ」との温かい声に免疫も活性化されることでしょう。もしそうでない場合、または教職員の方で心配な方は保健管理センターに相談にいらしてください。適切な医療機関をご紹介します。



ひとりで悩まず 保健管理センターへ

保健管理センター受付 029(853)2410
学生相談室受付 029(853)2415